

国書版

島木健作全集

第十二卷

島木健作全集 第十二巻

昭和54年7月25日 印刷

昭和54年7月30日 発行

著作権者との
申合せにより
検印省略

定価3800円

著 者 島 木 健 作

著作権者 朝 倉 京

発 行 者 佐 藤 今 朝 夫

制作・尾沼 汎

〒170東京都豊島区巣鴨3-5-18

発行所 株式会社 国 書 刊 行 会

電話 (917)8287(代表) 振替・東京5-65209

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

島木健作全集

第十二卷

国書刊行会版

第十二卷 目次

滿洲紀行……………五

地方生活……………一九

解題……………四〇五

監修

稲垣達郎

小林秀雄

中村光夫

編集

大久保典夫

小笠原克

高橋春雄

滿
洲
紀
行

北滿開拓地の課題

一

昨年（昭和十三年の夏）東北地方の農村を旅したとき、私は、その地方の人々が、滿洲開拓民の問題について強い關心を示しつつあるのを見た。秋田では、小學校の教師たちが、自分達の教へ子と青少年義勇軍との關係について、はつきりした意見を持つことを必要とされてゐた。青森では、滿洲事情についての講演會のあと、農民たちは、おどろくべき熱心さ、眞剣さで開拓地を問題にしてゐた。彼等のなかには若い娘もあつた。私はさらに北海道へ行き、そこでもおなじ問題について聞かされた。その人々は、滿洲開拓のことは北海道の農民を指導者とするのが、絶対に必要であらう、といふのだつた。そのいづれの場合にも、そこに居合せた私は、意見をもとめられた。しかし私は答へられなかつた。

今年の春から夏にかけて、私は北滿の各地をひとりあるきした。滿洲が私を呼ぶころにはいろいろなものがあつた。農民の問題を多少とも考へてゐる一人として、開拓地は自分自身の眼でしっかりと見ておきたかつた。すでに私に先立つて行つた人々は、若い滿洲國の魅力について語つてゐた。つねに人間に對する興味が先立つ私は、何よりも先づ新しい土地に成長しつつある新しい人間のタイプの想像した。五族協和といふ

壮大な夢が實現に向ひつつある姿が見たかつた。またかの國のインテリゲンチヤはどう考へいかに生活してゐるか、私と同時代にぞくする人々も多數行つてゐるのだが、その人々の現在はどうであるか。

そしてそれらすべての望みは、新しい社會と人の動きに、この時代の空氣にちかにふれたい、何かはげしく、眞剣なものなかで我身をゆすぶられたいといふ、作家のねがひにおいて一つなのだつた。「心を起さうと思はば先づ身を起せ。」——しかし、身を起し生活を動かすといつても、今の私などには、大してつらくもない百日ぐらゐの旅に身をおいてくるといふのが、せい一ぱいのところなのだ。きびしさを欲するといひながら、旅行には氣候のもつとも苛烈な時を、自然に避けるやうにし、はじめての土地だから、といふことで心をなだめ、人にも見過してもらはうとする程度なのだ。

私は多くの地方をあるき、さまざまな施設を見、たくさんの人々に逢つた。新しい土地における建設の姿を眼のあたりに見て、私は感動しないではゐられなかつた。それは、國の上から下までが、大きな理想によつて貫かれ、統一されてゐる、躍進しつつある若い國家にのみ見られるものであつた。「躍進といふ言葉は、この國においてのみ使はれるのです。」——開拓地の青年の一人が、昂然として言つたが、まことに生活の多くの場面は、この國に於ては、半年あるひは三ヶ月ぐらゐで、瞠目にあたひする一新ぶりを示すらしいのであつた。文字どほり五族が、一堂に會して、それぞれの民族の言葉で、一つ思想、一つ理想を述べ合つてゐる情景は、なにか深いしんとしたものを感ぜさせた。満人部落に深く入りこみ、汗と垢とにまみれ、蠅と蚤と南京蟲とにおそはれながら、長年月にわたる民族間の土地紛争の解決のために力を盡してゐるやうな日本の青年に接したときには、感動の涙がにじんだ。名においても、物質においてもむくいられることなく、そのやうな生活がすでに十年にも近いといふことは！ 死をかけて一瞬に事を決するといふ勇氣にまさる大

きな勇氣を必要とするこのやうな行爲が、いかに物靜かに、つつましい謙讓さでつづけられてゐることであらう。何年來、見ることのなかつた、行動の世界の美しさが私をとらへた。なにかも一擲して、さういふ世界へ入つて行きたいといふころをさへもゆすぶられるのだつた。

青年の創造的な精神はこの國では尊重されてゐた。轉向考たちは、過去を問はれることなく、小じゆうと的なせんさくの眼で見られることなく、その才能を發揮してゐた。ある義勇軍訓練所の幹部であるさういふ一人を私はたづねた。現在の彼の生活を眼のあたりに見、彼の指導の實際を見、また野の道を行きながらともに話した。夏草が咲きみだれる野のなかを行きながら彼と話したことを私はいつまでも忘れないだらう。

彼が現在のやうな生活に入るにいたつた筋道については、私にわからぬところはあつた。彼が語るところは、すべてそのまま、率直にのみこめる。しかし彼は問題をすべて論理的に處理し得てゐるとはいひ得ない。どこからついてもびくともしない構へがあるとはいひ得ない。飛躍があり隙間もある。かつての私はひとにも自分にも、さういふ隙間を許すまいとした。さういふ隙間を持つたまま移行する新しい生活といふものに、すべて、懷疑的であり否定的であつた。しかし今の私はちがつた。さういふ彼の隙間を衝かうとする心はなく、彼の一途な喜びは私にも傳はり、ほとんど脱俗者にも似た氣持で、全身をあげてそのやうな生活に没入し得てゐる彼を、尊くも思ふのだつた。

二

私は、北滿のおもな鐵道の線にはほとんど入り、その各々の沿線地方に幾日間かつつ滞在し、精粗の差は

あつても、足をとどめ、見聞することのできた開拓地は十五ヶ所ほどだった。青少年義勇軍訓練所は、ハルピン、孫吳、鐵驢、勃利、嫩江の各所を見た。狭く深く見る前に、一應、いろいろに條件の異なる各地を廣く見ることの必要を感じたのだつた。

部落の人たちはいたるところ、親しげな笑顔で迎へてくれた。挨拶の言葉をすまずと、誰でものやうに、私もまた尋ねてみる。

「どうですか？ 満洲は。」

すると彼等は答へる。

「そりやくらべものになりませんよ。内地（日本）なんぞは。満洲の方がいいですよ。」

どこで誰にきいても、きまつてさう答へる。しかしそれが習慣的に、いひ慣らされてゐる言葉でも、外來者に對する強がりでも、負け惜しみでも、見えでもないことは、聞く私にわかるのだつた。村を引き拂つてやつて來た手前、意地にもさう思はなくはやりきれないといふのでもなく、大きな使命を背負はされてゐる手前といふのでもなかつた。彼等のいつはらぬ氣持は、女や子供の口を通して聞くと、眞情はあふれて胸をうつのだつた。

「來た當座は、それは、寂しいと思ふこともありました。日暮など、門口に立つてぼんやりしてゐますと、子供が、なにをおつ母さん泣いてゐるの、をかしい、といつて笑ふのです。心配してゐた子供の方が却つて元氣で、廣い廣いといつて大喜びです。いろいろ聞かされて來た匪賊や寒さのことはなんでもありませんし……、作るものはなんでもよくできますし、學校やお醫者さんのことも心配ありませんし、もうここにお墓を立てることにきめました。」

母の一人はしみじみと私に語った。

それから彼等はいろいろと話してくれる。農業國滿洲の好きについて話してくれる。四國九州の溫暖な地方の出身者も零下四十度の寒さをもものとしてゐないし、六十七十の老人も至極おちついてゐる。若い女性は寂しさに慣れて、子供はすこやかに育つてゐる。さういふ彼等にちかに接し、その話をきき、さらに見るからに肥沃さうな眞黒な土が、見得る限りの廣さで耕されてゐるのを見、一應はととのつた個人住宅や、農産物加工場や、畜産場などの建設が進みつつある實際を見たならば、訪問者たちは誰しも安心もし、感動もするであらう。そして多少は誇張された表現をもつてその感動をつたへ、讃嘆し、彼等の今日にいたるまでの勞苦に同情する。これは當然なことである。

北滿開拓地の問題を、全體として考へるとき、あきらかにそれは、第一の段階ともいふべきものをひと先づ終へたと見るべきだと私は思ふのである。一部の人々を除いて、一般に、開拓地について憂へられてゐたことは、先づ、寒さであり、治安であり、土地は果していいかであり、作物はどうか、ことに米はどうかであり、娛樂的なものからとざされた僻遠の地に堪えられるかであり、學校や醫療はどうか、子供は果して育つか、等であつた。一部の人々にとつて疑念はなくても、實際に移住する農民自身に不安が残るうちは、彼等自身の生活によつて實證されぬうちは、問題として残るのである。しかも今日、入植後數年の經驗は、上述の不安の多くが、彼等自身において解消されたことを示してゐる。少くとも彼等開拓民は今日主觀的なおちつきは得てゐるのである。あくまでもここでやらうといふ覺悟はできてゐるのである。満足さへしてゐる。初期の頃に見られたやうな退團者は多くは見ることができない。ある人々が憂へたやうな出稼根性といふが、ごときものもない。

このことはもつとも重要なことである。みたされねばならぬ第一の條件である。

しかしながらこのことをもつて、ただちに、滿洲開拓民のことがもはや成功の域に達したといふとするならば、それは冷靜に事實を見るものとはいへぬのである。開拓民が元氣である、といふことは、もとより單なる主観ではない。現實の、生活の裏づけがあることである。しかしながら彼等によつても、現在及び將來が、必ずしも見透されてゐるとはいひ得ない。誤算や錯覺さへもあり得ることである。甚だしきに至つては、自分達の今日の生活がなほ、公の機關による大きな經濟的支援の下に成り立つてゐるのだといふことを、忘れて考へたり言つたりすることだつてあるのである。

そこで私には次の段階といふものが考へられ、そして今日の開拓地の實際は、すでにその段階に入つてゐると思ふのである。

自然的條件が、開拓の成功に必要なものを具備してゐるといふことは、開拓民自身によつて實證されつつある。そして一方には、決意を持つた優秀な開拓民がある。自然的條件と人的條件とはここにそろつてゐる。今日以後の問題の中心は、この二つの要素がいかに結びつくべきかといふ、結びつきの型態のなかにあるであらう。この人間がこの自然を、いかにして農業的に開發すべきかといふ、技術的な、經營的な問題のなかにあるだらう。もちろんさういふことはそもそも最初の問題であつた。それを考へないで入植ができるわけもない。だが、その考が眞に練られたものでなかつたこと、眞に科學的な、合理的な、技術と經營の根本方針の樹立に缺くところのあつたことは、當局者自身が言明してゐることである。すでに入植後數年の經驗がある。今こそこの實際の生活經驗が批判され、そこからのものが攝取され、新しい方針の樹立に向ふべき時であらう。

ここで私は、開拓地を見て来た作家である自分といふものを考へる。

私は農業そのものについてはほとんど知るものではない。開拓地の見學そのものがただちに滿洲旅行の目的といふのでもなかつた。滿洲に惹かれていつた私の氣持はさきにのべたやうなものだつた。開拓地を見るといふことはむしろひとつの方法なのだつた。しかし今、開拓地について何かを言はうとする時、私はかの繰返しを今また自分も繰返さうとおもはない。かの繰返しといふのは、團體などをつくつて、忙しさうにのしてあるいた人人からとくに聞かされた讚嘆のこゑである。開拓民はじつに元氣だ、土地が廣く肥えてゐるのには今さらながらおどろいた、生活もゆたかだ、内地のやうにこせつてゐない、——多くの見學者から聞きうるものは大抵さういふやうなものであり、それ以上には出でなかつた。私はしかし、我々が今日、開拓民に對する讚嘆と愛のころをあらはすのに、さういふ繰返しが必要だともおもはなければ、またそれでいいとおもはない。開拓地は進んで來てゐる。

讚嘆のこゑが、ほめられるものの立派さと、ほめるものの心の美しさを感じさせることなしに、空々しさを感じさせるといふのはどうしたものであらう。事はひとの生活に關してゐるのだから何をいはうと自分にはかへつて來ないといふ氣易さがそこにはないのである。自分の生活に直接ひびいて來ることについてならば、めつたにほめられもせぬ筈である。ほめ言葉の一つにも慎重である筈である。ましてや、單に廣い面積が耕作されてゐるといふだけで、生活がらくであらうと思つてみたり、（その廣い土地がどういふ方法で耕作されてゐるか、また滿洲の十町が日本の何町に當るか、ここでは考へられもせぬ）赤煉瓦の個人家屋を見て、日本では地主も住まぬ立派さ、少し贅澤すぎはしないか、などといつてみたり、（溫暖な季節に訪ねる彼等は零下四十度の冬を忘れてゐるのであらう）たまたま農閑期に來て見て、滿洲の農村はなるほどの

んびりしてゐると言つてみたり、（ある作物の除草と、ある作物の刈取りとが一時にやつて来る、夏期の農村の姿を思つても見ぬのである）そのやうなことがあり得る筈はないのである。國家の支援による建設資金を潤澤に使つて營まれてゐる現在の生活のゆたかさに感激する前に、もつと冷靜に、やがてそれらの支援から離れ、一本立の農民として、税金もおさめ借金も返しつやつて行くために思ひをひそめるべきであらう。そのやうなのが、眞に開拓地を愛するものの態度であらう。すでに、私は一度ならず開拓地の人々から聞かされた。彼等は、開拓地について書かれる文章のことをいひ、自分等への讃辭がしばしば見當ちがひなものにもとづいてゐることを、あきたらず思ふといふのだつた。てれ臭く、時には腹立たしくもなるといふのだつた。とらはれぬ眞實の言葉を欲してゐるものは、誰よりも、當の生活者である開拓民自身なのである。

私が、農業の専門家の領域にぞくするやうな事柄にも時にはふれ、不熟な知識をもてあそぶものと、ある人々からにがにがしく思はれることがあらうと、それはやむを得ぬことである。開拓地の發展が、新しい段階が、私ごときものにまでそのやうな發言をさせるのである。苦々しく思はれることも、私は、開拓民に確かに接することによつて學んだのである。望めば與へられたであらう快適な旅の便宜をもすて、身を苦しめることによつて得たものもあるのである。

三

何が當面主要な諸問題の第一であらうか。

第一次から第五次までの開拓團は大體においていはゆる個人經營の段階に移つたといはれるところである。

第五次は本隊入植後第三年目にあたり、今年もなほ五人組といふやうな經營單位をとつてゐるところもあるが、すでに實質的には全くの個人經營に移つたところもある。第五次以外においても、同一の團でありながら部落々々で方針の異なるところもある。既耕地を各戸へ配分してゐる状態を見ると、個人經營による現在の能力を考へてかなり制限し、團の共同管理の面積を廣く取つてゐるものがあり、然らざるものがある。

各團の一戸當り平均の耕作面積といふものは、開拓關係の書物などによくあげられてゐる。それはもちろん年々少しづつ増大して行つてゐるものであるが、大體四、五町歩から七、八町歩といふところであらう。平均自作面積ととくに記してある本もある。私のもつとも知りたいと思ふことは、しかし、これらの書物の數字のなかにはないのだつた。私の先づ知りたいと思つたことはかうである。開拓民は一體、自家勞力をもつてどれだけの面積をこなし得る能力を今日持つてゐるのか？ 平均自作面積と記されてゐるそれは、嚴密に自家勞力による面積と解していいか、どうか？

私が最初にこのことを知りたいと思つたのは當然であらう。なぜならば、日本の指導者たちによつて定められた、滿洲農業開拓の根本方針の第一には、

「自家勞力を本位として耕作し且つ經濟的に成立する自作農を設立すること」

と、いふことがあげられてゐるからである。ここでは何等かの集團農場のごときものが考へられてゐるのではない。根本方針はあくまでも自作農主義である。ところが、これらの指導者たちの手に成つた數冊の書物を調べてみても、一戸當平均耕作面積中、自家勞力による面積といふものは、明らかにされてはゐないのだつた。